網走月報　別刊
令和六年六月号

教会長夫妻ねりあい感話

テーマ「おやさま」

女満別分教会長夫人　三幣　美代子

この度のお題は「教祖」ということで、教祖といいますと、私は、熊本の教会で生まれ、母が教祖大好き人間だったこともあって、幼少期より常に身近な存在でありました。ことある毎に何かを母に相談すると必ず話の最後には「教祖を見なさい」とか「教祖のことを思いなさい」ということを言われ、正直、思春期の頃などは、たまに教祖以外のことも聞いてみたいと思った事もありましたが、そのような時でも母は決まって教祖のお話をしてくれました。

母は自分のいんねんを悟ってかどうかはわかりませんが、常々「女の子はあまり勉強しなくても良い、将来男の人を見下すようになっては困るからと、高校を卒業したら専修科に入って、その後、入れてもらえるなら真柱様のお宅か、もしくは婦人会の管轄である当時の天理高校女子寮の幹事として勤めさせて頂きなさい。」と言っておりました。なので、私は迷うことなくそのように進ませて頂きました。又、両親は私達兄弟の前ではいつも楽しそうにしていましたので、私はどんなに小さくてもよいから、いつの日か教会に嫁がせてもらいたいと思うようになりました。今は小さな教会でもなく、身体の大きな会長さんと一緒に御用をさせて頂き、何より四人の子供を授かったことが一番の喜びです。

ここで女満別での教会生活で一番心に残っているエピソードをお話したいと思います。主人が会長就任の時、既に女満別の前会長様ご夫妻は不在でしたので、何事も夫婦で談じ合い、たすけ合いながらを目標に通らせて頂きました。教会神殿、建物は建築五十年を越え、理の重さと古めかしさを感じました。

夏は室温三十八度を越え冬の神殿はマイナス二十度まで下がり、野菜は朝御供えすると下げる頃には凍っている！という感じでした。このような教会生活の中で、教祖のひながたを多少なりとも肌身で感じさせて頂けました事は現在家族の宝物になっております。

毎年冬を迎え、神殿内がマイナス十度を下回る頃になりますと、教祖最後の御苦労を思い出します。教祖伝を拝読しますと、この冬は三十年来の寒さ（当時の気温はマイナス十度程）であったというのに、八十九歳の高齢の御身をもって拘留させられ、冷たい火の気もない板の間で正座をさせられました。夜お休みになる時間は寝具も与えられず、上に着ておられる黒の綿入れを脱いで、それをかぶり自分の履物にお孫さんのひさ様の帯を巻きつけ、これを枕として休まれた。又、この時ひさ様は一晩中教祖の枕元に座り両手を広げてお顔の上を覆った。と記してあります。

このお姿を拝すとき、私達はストーブもあり、ひざ掛けや毛布もあり、有難いことばかりです。さすがにマイナス二十度程になりますと、ストーブで室内が暖まる頃にはおつとめも終わっており、神様に申し訳ないのですが、教服やハッピの下に分厚いジャンバーを着て、首巻や手袋などしておりました。又、子供達も外用のスキーウェアを着ておつとめや神殿掃除をしておりました。

結婚して三年目に長男公信を授かりました。初めての子供でもありますし、三幣の母はすでにおられなかった事から、主人が熊本の母に里帰り出産の相談をしてくれたことがありました。すると、母は開口一番「どこの子を産ませてもらうの」「熊本の子を産むのか、女満別の子を産むのであれば、女

満別で産んで女満別で育てさせてもらいなさい。そして、教会の信者さんにたすけてもらいなさい。」との返答でした。

その後、夫婦で相談させて頂き、周りの方のお世話になりながら、主人と二人三脚での子育てがスタートしました。後日談ではありますが、朝方長男を出産して、まだ数時間ほど休んでおりますと、自教会の役員さん夫婦がパジャマ姿にジャンパーを着てお祝いに駆けつけて下さいました。まさに、着の身着のままで来て下さった御真実に御礼申し上げますと同時に、「女満別で育てさせてもらいなさい。」という母の言葉が心に沁みる今日この頃であります。

今から十数年前、二人目の子を流産する節がありました。無事に処置が終わり、数日で退院させて頂き、落ち着いた頃に心配をかけた熊本の両親にもお詫びの電話をしました。すると、母はなぜか「ごめんね。」と謝ってくるのです。聞いてみると「あんたがお腹の中にいる時おたすけに掛かっている人がいて、あんたの命を神様にお供えしたんよ…。だけど、こんなに大きくなるまで身上をお借りして、結婚もして子供も授かって有難いと思ってる。だけど、こんなことになってごめんね…。」と話してくれました。

その時、私は正直なところ、流産という節の辛さのあまり「また、人の命を勝手にお供えして…」なんて思ってしまいましたが、後で聞いた話、母は周りの方から、少し私を熊本に帰してやるようにと言われたり、ある人には「奥さんは冷たいね。」と随分言われていたそうであります。しかし、母はそんな時でも「一時の気休めにしかならないから…」と私を実家に帰そうとはしませんでした。

しかし、そんな母の信仰姿勢のおかげで、私は少しずつ女満別の人として根を張れたと思いますし、今は本当に良かったと親に感謝しております。同時に、教祖のひながたとはいえ、いくらおたすけとはいえ、私は自分の子供の命をお供えできるだろうか、又、娘が同じ節になったとき、そう言い切れるだろうか、と思います。

今から三年前、女満別分教会は創立百周年を迎えさせて頂きました。この旬に、役員さんを中心として、「普請をさせて頂こう！」との声が上がり、勿体なくも改修のお許しを頂きました。

工事期間は冬をまたいで二期にわたって行われました。期間中、会長さんが各部屋の天井や壁の解体ひのきしんに汗を流す姿や、休日には息子達も釘抜きや木材の研磨ひのきしん、そして婦人部では神殿御簾の張り替えひのきしんと大変貴重な時間をお与え頂き、これが「一手一つ」の姿なのかな、と喜ばせて頂いております。

見違えるほど綺麗になり、今では火を点けなくても十度前後と信じられないほど暖かくなった神殿でおつとめをつとめさせて頂けて、幸せを感じずにはおれません。又、真冬に白菜や水菜などの葉物をお供えさせて頂けた時の感動は忘れられません。全ては教祖のひながたのお陰であり、先人先生の御遺徳に心から御礼を申し上げるところでございます。

教祖百四十年祭に向かう今日、色々な日がございますが、自教会で掲げている三つの活動方針

一、朝夕のおつとめをつとめよう

一、おたすけの喜びを味わい、次代に信仰の喜びをつなげよう

一、教会参拝者・来会者三、〇〇〇名

を各講社と連携して、教会、家族一丸となって歩ませて頂いております。

現在、四人の子供をお与え頂き、子育てに奮闘させて頂く中に、ひながたが大好きだった母の声一つ一つを忘れず、子供達に信仰の喜びを伝えていけたら…と思います。そして、今は網走の母、熊本の母とどちらを向いても母がいない姿を思う時、しっかり自分のいんねんを自覚すると共に、子供達の結婚式には、夫婦元気で出させてもらいたい、というのが私達夫婦の夢でもあります。

これからも末代に向かって、いつも教祖とご相談しながら夫婦力を合わせて年祭活動に精一杯つとめさせて頂きたいと存じます。